

## 農村計画と家と村の問題

長谷川 昭彦

まず第一に、この時点において、この農村計画という課題が取り上げられなければならない研究の動機といふものを、はつきりさせ

る必要があるのではないかと思います。農村計画という言葉が叫ばれなければならない、そのポイントとしては、よく指摘されるところの「村」が解体してきつたことと、「家」がくずれつつある現在の状況下で、それに代わるべき新しいものが何であるかを問題にすべきであると思います。そのためには、「家」や「村」をもう一度見直してみて、その構造や機能を検討してみる必要があるのではないか。

こういう観点から考えてみると、「家」は家族農業経営に基礎をもっており、その家族農業を補完する形で「村」があつた。家族經營の農業の一番根幹をなすのは、いうまでもなく、稻作である訳です。ほとんどの農家は、稻をつくり、「村」が水利や農道、肥料の源泉である山林といったものを提供することにより、稻作の栽培の基盤を提起してくれていた訳です。その稻作が、少くとも日本農業の主流を占めておる限りにおいては、「家」というものは十分存続し得るし、それと並んで、「村」も維持される。しかし、この稻作、それ自体が高度経済成長期を経て、食管制の赤字の問題や稻の生産調整という形で否認を受けてきた。それで、稻の代わりに、稻以外の野菜・果樹・畜産などの各種の作物が導入されてきた。稻作の基盤、基本は「村」にあつたわけですが、稻以外の作物が入ってくると、それらを管理保全する主体も変化せざるを得ない。従来の「村」に代わって、農場事務所とか、それから県の出張所などといったものが主体になりまして、いわゆる地域農業が問題になってきた。地域農業というのは、農家の經營類型と結びつけな

がら、稻作以外の作物をいかに、ある地域の中で、組み合わせるかということにあるわけです。そして、兼業化の傾向に示されるように、地域農業と並んで地域産業の問題が重要となつてくる。かくて、従来の部落や村を超えたより大きな地域というものが、次第にはつきりしてくると思う訳です。

次に、農村計画はそういう地域農業や地域産業の面だけでなく、さらには環境の整備、あるいは、生活のニーズの充足ということが、重要なポイントとしてあるのではないか。この点からみましても、確かに従来の部落などの小さな範囲内で充足したり、配置できるような施設を考えるとともに、かなり広い範囲の地域の環境整備、施設の充足が考えられなければならない。

それから第三の点としては、社会関係、社会構造といった面から、農村計画といふことをみてゆかなければならぬ訳ですが、この面からは人と人との関係、従来の連帯性は崩れつつあるといわれるが、それに代わってどういうものを考えるべきかという問題である。現在、よく言われる「村づくり」において、昔の農村の連帯性をそのまま復活するという「村づくり」になってしまって、現実の入れものは新しくなっているのに、中味は古いということでよいのであるうか。今までの村落内部の直接的な結合が、次第に、間接的なないし合理的な関係に置きかえられつつあるのではないか。新たな農村の社会関係というものが、当然考えられなければならないのではないかと思います。

簡単にまとめてみると、「家」と「村」というものが、次第に

変質しつつあるのが現状であって、これらを、例えば、地域農業にどういうふうに関係しつつあるか、また、環境の整備、保全にどういったかかわりあいをもつていてか、それから、社会関係、社会構造にどう関係があつたかということを丹念に調べることによって、「家」と「村」に代わるべき新たなものが提起されるのではないかだろうか。新たな生活の枠組みを探り出し、創り出してゆくことが農村計画ではないだろうか。